



展示館 ブラザーコミュニケーションスペース

ブラザーコミュニケーションスペースは、みなさんとブラザーをつなぐブラザーグループの展示館です。2005年愛知万博の年に開館しました。ミシンゾーン、ヒストリーゾーン、体験ゾーンの3つの展示ゾーンから構成され、ブラザーが100年以上にわたって培ってきた「モノ創りのDNA」を製品展示を通して紹介することで、世界の市場で挑戦し続けるブラザーの過去から現在までをご覧ください。世界のアンティークミシンや代表的な製品、新製品、環境・社会貢献活動まで幅広くご紹介しています。また刺しゅうミシンや最新カラオケなども体験できる展示館です。

目 次

●第41回東海三県博物館協会研究交流会の報告	2
●平成28年度愛知県博物館等職員研修会の報告	3
●平成28年度部門別研修会の報告	
職員研修会1	6
職員研修会2	7
●災害発生時における支援活動要領にもとづく非常連絡訓練の報告	9
●表紙館の御紹介	13

第41回東海三県博物館協会研究交流会の報告

「ミュージアムへ行こう！…魅力的な集客とは —ミュージアムがもつ可能性を考えよう—」

開催日：平成28年12月2日（金）

本年度の交流会は、四日市市立博物館を会場に開催され、三県合計57名（うち愛知県14名）が参加した。

〈内容〉

○あいさつ 13:00～13:10

主催者あいさつ 三重県博物館協会会長 / ミキモト真珠島真珠博物館館長 松月清郎氏

歓迎あいさつ 四日市市立博物館館長 谷岡経津子氏

交流会趣旨説明 三重県博物館協会事務局長 岸田早苗氏

○事例発表 13:10～13:40

「博物館の再発見～そらんぼ四日市として～」

四日市市立博物館 廣瀬毅氏・四日市公害と環境未来館 大杉邦明氏

「名古屋市博物館における外部連携の試み」

名古屋市博物館 藤井康隆

「多治見市モザイクタイルミュージアム 誘客から交流へ」

多治見市モザイクタイルミュージアム 村山閑氏

○グループセッション 14:50～15:20

○次年度開催県挨拶 15:20～15:30

愛知県博物館協会

○会場施設見学

〈概要〉

近年数多くの文化関連施設が併存しミュージアムの求心性も変化しているなかで、関連機関や地域戦略などとの連携を含めた利用促進＝誘客の努力は一層必要である。今回の研究交流会は、より多くの人に親しみ活用していただくために、ミュージアムがどのように取り組んでいくべきかを考える機会とすることが目的であった（開催趣旨より要約）。

三重県の廣瀬・大杉両氏からは、四日市市立博物館・四日市公害と環境未来館における地域の歴史・文化継承の拠点としての方向性について発表があった。博物館常設展・四日市公害と環境未来館、プラネタリウムの3つの異なる施設を有機的につなぎ、時間軸と空間軸の両面から地域を捉えることで、幅広い年齢層に多様な学びの機会を提供しようとしているとのことである。

愛知県の藤井からは、名古屋市博物館がこれまでおこなってきた小中学校・大学との連携、地域社会との連携のほか、最近の特別展の際に新たに試みた企業との協力やSNSを活用した外部発信の事例などを紹介した。

岐阜県の村山氏からは、多治見市モザイクタイルミュージアムにおける誘客について発表があった。何のために集客するか、来館者に何を伝えるかを念頭に、誘客からいま一歩進んで来館者との交流に積極的に取り組むさまざまなイベントを開催している。

事例発表後には、あらかじめ発表者ごとに分けられた参加者のグループで、それぞれに発表者を囲んだグループセッションがおこなわれ、積極的な質疑があり有意義であった。その後、四日市市立博物館・四日市公害と環境未来館の展示を各自で自由見学した。次年度の東海三県博物館協会研究交流会は、愛知県博物館協会が開催することとなる。今年度の交流会のあり方を踏まえ、愛知県でも有意義な交流会となるよう検討したい。

(藤井康隆 名古屋市博物館 学芸員 / 愛知県博物館協会 事務局)

平成 28 年度愛知県博物館等職員研修会の報告

「町並み保存とミュージアム」 開催日：平成 28 年 11 月 1 日（火）

本年度の博物館等職員研修会は、一宮市尾西歴史民俗資料館において、「町並み保存とミュージアム」と題して研修会を企画し、美濃路「起宿^{おこし}」、三河と信州を結ぶ伊那街道(中馬街道^{ちゅうま})に位置する「足助宿^{あすけ}」、そして東海道「二川宿^{ふたがわ}」がある 3 市の町並み保存と博物館の関わりの事例発表、また、開催館に隣接する脇本陣「旧林家住宅」、さらに、「世界のタンゲ」として知られる丹下健三氏が設計した「墨会館^{すみ}」を見学し、県内の美術館・博物館等より 35 名が参加した。

まず初めに一宮市尾西歴史民俗資料館吉川宏之館長よりご挨拶を賜り、その後、開催館である同館学芸員宮川充史氏より、「美濃路起宿の町並みと保存活動」と題して事例発表があった。起宿は東海道宮宿と中山道垂井宿を結ぶ美濃路の宿場の一つ、目の前に流れる木曾川を渡れば美濃国となる場所に位置し、規模は十町六間、明治以前、將軍上洛や朝鮮通信使の往来では 270 隻の船を木曾川に浮かべて架橋した「舟橋」を設けたことでも知られる。明治 24 年の濃尾地震により多くの建造物が倒壊し、その後昭和 40 年代に町並み保存の運動が起こったという。昭和 50 年代には「起宿記念館」が開館するとともに、起宿の町並み調査が行われた。財政事情もあったが、地域住民の町並みへの関心、また、平成 14 年には濃尾地震後の再建ではあ



一宮市尾西歴史民俗資料館 学芸員 宮川充史氏



起宿脇本陣「旧林家住宅」

るが、旧林家住宅、同 22 年には濃尾地震にも耐えて残った「湊屋」が国の有形登録文化財に指定され、より市民の町並み保存に対する意識が高まった。特に、平成 21 年には上記湊屋の保存と活用が提案され、ボランティアが管理・運営する、「湊屋倶楽部」が設立され、市よりは若干の市民活動への助成金が交付され、現在では週に数日、季節の食材を用いた食事や軽食を提供し、建造物の保存と活用を行っているというお話を頂いた。



豊田市教育委員会 井上美知代氏

次に、豊田市教育委員会 足助町並み整備担当の井上美知代氏より、「足助の町並みを活かしたまちづくりへの取り組み」と題する発表があった。豊田市は「クルマの町」、「ものづくりの町」として知られるが、先の平成の市町村合併に伴い、旧東加茂郡足助町も、新制「豊田市」としての一步を踏み出して今日に至る。足助町は香嵐渓が紅葉の名所として知られるが、この景観は大正末から昭和初期にかけて植林・整備がなされたものであり、古くよりこの地は伊那街道の中継地としても栄え、江戸中期から明治末期に至る建造物が今もなお多く残され、南北

を山で挟まれた足助川の谷筋に、段丘上に長さ2キロの範囲に町並みが存在している。この足助の町並みの保存は昭和50年度、有志30人で「足助の町並みを守る会」が発足したことに始まる。同53年度には、「第1回全国町並みゼミ」が有松（名古屋市）とともに共催、55年度には住民の自主的な規制によって町並みを守ることが決められたという。また住民のみならず企業も町並み保存に協力し、コンクリート造りの事務所建造物を伝統的建造物に改めた例も発表された。平成5年には「足助まちづくりの会」が発足し、さらにはまちづくり団体の「チカクのトビラ」、古民家を素人で改修する集団である「あかりnet」、足助の町を住民と盛り上げていく「足助町並みサポーター」などが相次いで立ち上がり、足助の町並み保存と伝承に積極的に取り組んでいる様子が報告された。また、春先には各戸でひな人形を飾り披露する「中馬のおひなさん」や、夏には竹かごと和紙で作った行灯を街道沿いに並べて照らす「たんころりんの夕涼み」なども現在では風物詩として定着、住民のみならず公的な組織も一丸となって町並み保存の活動に励んでいることが窺えた。

最後に、豊橋市二川宿本陣資料館学芸員和田実氏より「東海道二川宿のまちづくりと博物館」と題する事例発表があった。二川宿は東海道五十三次の33番目の宿場町として知られ、その規模は十二町二十六間に及んだという。東海道に遺る数少ない本陣遺構であり、平成3年、隣接地に豊橋市二川宿本陣資料館が開館し、本陣施設と展示施設を一体化する史跡整備がなされた。その町並みづくりの沿革は、昭和58・59年度に行われた二川地区環境整備基本調査に始まる。その後の二川宿のまちづくりに関わる課題は、

- ・ 歴史的建造物の保全
- ・ まち並みの調和の回復
- ・ 賑わいの回復
- ・ 道路環境の向上
- ・ 空地、空家の活用
- ・ 伝統文化の継承

であったという。そこで、その取り組みとして挙げられたのが、「文化財の整備」、「まち並み景観形成」、「住民活動」であった。そしてその目的を達成し、さらに昇華させる起動力が、「住民」、「市政」だけではなく、地元にある大学の協力をも仰いでの「協働」という活動であった。両者共に「利」を得られる



豊橋市二川宿本陣資料館 学芸員 和田実氏

ことを近年では「ウィンウィン（win win）と言うが、この三者の取り組みはまさに「ウィンウィンウィン」なのかも知れない。二川宿も前述二者と同様、町並み保存を図っているが、起宿・足助宿と比べ、近代化、また戦後復興での町並み保存の大変さは推して知るべしである。但し、わが国の大動脈とも言える国道1号線は、旧東海道をわずかに外れて建設されたため、有り難いことに町並みは取り壊されることを免れた。その中で、地域住民は、二川宿を守り、さらに軒先には一輪挿しを掲げたり、街道沿いにプランターを並べ、景観を華やかなものにするとともに、夜店を開催したり街道沿いの美化活動などを自発的に行い、加えて「二川宿まち並み通信」の定期的な発行や、地域イベントとして「二川宿本陣まつり」での大名行列の復元、灯籠で街道沿いを彩るなど、宿場町を有効に活用している様子が窺えた。そして近年では、旅籠「清明屋」、商家「駒屋」の寄付を受け、「本陣・旅籠屋・商家の3か所を見学できる日本で唯一の宿場町」という謳い文句を掲げて、宿場町としての地域活性化を目指しているようである。

御三方の発表を通じて、行政と地域住民の連携が、町並み保存と活用を発展させていく起爆剤であると実感した。



湊屋にて

その後、一旦一宮市尾西歴史民俗資料館を離れ、徒歩で美濃路を散策しながら昼食会場へ向かう。天気もよく、古い町並みを歩む内、気分はいにしへの旅人の心地となった。昼食は前述の湊屋さんが特別にお店を開けて下さり、研修会受講者は地産地消の素敵なおもてなしを受け、舌鼓を打った次第である。

昼食を終え、湊屋さんの建築様式を丹念に見学する者、また近くにある船場の跡を見学する者、それぞれが有意義に時間を過ごし、再び資料館へ。同館で開催されていた特別展「美濃路起宿 脇本陣林家～知られざる脇本陣の仕事～」や、隣接する脇本陣

を見学し、14時30分、貸切バスに乗り、一同「墨会館」（一宮市小信中島）へ向かった。同館は昭和32年の竣工、前述の通り、丹下健三氏の設計で、同館の名称は市内で繊維業を営んでいた社長の名字に由来する。平成20年に国の登録文化財の指定を受け、その後一宮市が取得をし、現在はこの地域の公



「墨会館」見学風景



「墨会館」外観

民館として活用されている。参加者は担当者より概要傾聴ののち、3グループに分かれて施設内の案内を受けた。建造物の内部空間、また細部のデザインは、竣工後60年を過ぎた現在においても全く古めかしさを感じる事のない洗練された印象を与え、改めて同氏の独創性に感嘆した次第である。

同会館を15時30分に辞し、駅までバスで送迎頂き、予定通り無事研修会終了の運びとなった。今回の研修会に参加し、まさに温故知新の単語と、伝承・活用の大切さ、そして地域のパワーが重要であることを感じる事ができた。

最後に、本研修会開催にあたり、講演依頼を快諾下さった皆さま、また会場提供・下準備を頂いた一宮市尾西歴史民俗資料館の皆さま、そしてご参加頂いた皆さまに御礼を申し上げます。

(内田 雅之 熱田神宮宝物館 宝物係長)

平成28年度愛知県博物館協会 部門別研修会の報告

研修会1 「今、改めて考える博物館とボランティア」

平成29年3月8日(水)、豊田市美術館において教育・普及部門研修会を実施し、48名の参加者があった。今回の研修会のテーマは「今、改めて考える博物館とボランティア」とし、日本の博物館でボランティアが導入されてから現在までの議論や施策についての講演や、ボランティアの活動が顕著な館の事例を聞くことで、自館の活動にフィードバックすることを目的とした。

研修会に先立ち、各館にボランティアの活動内容や課題に関するアンケートを取り、当日に資料として配布して、情報共有をした。

講演

基調講演では青山学院大学教授 鈴木真理氏に「博物館とボランティアのこれまで—議論の継承を目指して—」というテーマで、ボランティア活動を社会教育の観点から考えることの必要性や、博物館がボランティアをどう捉えるべきか、ということなどについて、事例を交えながらご講演いただいた。続く事例報告では、豊橋市自然史博物館主任学芸員加藤千茶子氏と豊田市美術館学芸担当長 都筑正敏氏にご講演いただいた。加藤氏からは、教育普及と資料整理の2分野の活動があり、ボランティアが中心となってボランティア通信を発行していることなどをご紹介いただいた。都筑氏は、開館してボランティア活動を始めてからこれまでの経緯や、毎月定例会を行うなどの運営のあり方などについてご紹介いただいた。

講演の後に質疑応答の時間を設け、ボランティアの自主性を引き出す方法や、ボランティア活動を進めるに当たって参考にした館があるのか、などの質問があり、それぞれ講師にご回答いただいた。

豊田市美術館ボランティアによるギャラリートーク

質疑応答の後、3つのグループに分かれ、豊田市美術館のボランティアによるギャラリートークに参加した。豊田市美術館では、ボランティアと参加者が対話をしながら、展示資料を鑑賞するというギャラリートークを行っており、ボランティアの問いかけに対して考えることで、参加者は展示資料の新たな見方を発見することができた。



鈴木真理氏による基調講演の様子

今回の研修会では、ボランティアの理念や事例報告を聞くとともに、実際にギャラリートークに参加することができ、自館でのボランティア活動について考え、課題を解決していくヒントを得られたと感じる。

(豊田市郷土資料館 学芸員 山田佳美)



ボランティアによるギャラリートークの様子

研修会 2 「博物館における SNS の活用」

平成 29 年 2 月 10 日 (金) 愛知芸術文化センターにおいて広報に関する教育・普及部門研修会を実施した。参加者は 47 名であった。今年度の研修テーマは「博物館における SNS の活用」である。事例発表の講師に小埜光樹氏 (国立民族学博物館管理部総務課広報係長)、講演の講師に岡本真氏 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社) をお招きし、今日、重要な情報発信手段となった SNS を効果的かつ安全に用いるために博物館での活用の目的や意義、注目すべき事例などをお話いただいた。また、事例発表・講演後は、各館それぞれの立場からより効果的に SNS を活用するための質疑応答の時間を設けた。

事例発表

小埜光樹氏 (国立民族学博物館管理部総務課広報係)



小埜光樹氏 (国立民族学博物館管理部総務課広報係)

国立民族学博物館 (通称・みんぱく) は、大阪万博跡地に 1977 年に開館した世界の人々のくらしと文化にふれる、文化人類学と民族学をテーマにした世界最大級の民族学博物館である。収蔵品は世界各地で収集した生活用具約 34 万点で常時約 1 万 2000 点を展示する他、儀礼や芸能を紹介する映像を公開している。みんぱくで活用する SNS は Facebook、Twitter、You Tube の 3 種である。Facebook と Twitter は可能な限り毎日更新することとし、基本的に同じ内容とするが、情報の出し方として Facebook はより

公式的に、Twitter は文字数制限があることからくだけた表現を用いるとのことである。みんぱくでは SNS を活用する目的を館の活動の広報 (ブランド認知の向上、入館者の増加、利用者の増加) と関心を持つ人たち同士がつながる場の提供 (情報交換、意見交換) においている。投稿内容は、1 「博物館活動」 (特別展・企画展の開催告知や展示資料の紹介、展覧会で紹介しきれなかった作品解説、催し物や博物館の裏側の紹介)、2 「キャンペーン」 (フォロワーを増やす試みとして感想を投稿すると図録プレゼントなど)、3 「研究活動」 (普段は顔の見えにくい研究者の活動の紹介)、4 「季節物」 (季節感と館を身近に楽しんでもらえるような内容)、5 「周辺施設」 (周辺施設の話題に便乗して館をアピール)、6 「リツイート」、7 「映像」 (常設展や特別展の紹介映像、研究映像) などである。みんぱくではこれら SNS を無料で利用できる自前のメディアであると位置づけるとともに、想定外のつながりへと発展する可能性があることから、さらなる有効的な活用法を模索しているとのことである。SNS の活用で危惧される「炎上」については過去 3 年半で一度もないが、セキュリティの徹底と個人的な思想・考えは投

稿しない、研究に関する内容は公式な文言を用いる、一般の方の肖像権、資料借用条件に最大限配慮するなどの良識に基づいた運用を心掛けている。事例発表の最後に、今後の課題としてユーザーへの個別対応や没人格的にならない工夫、展示と連動させたより広範な展開などが挙げられた。

講演「博物館における SNS の活用ーその可能性、運用にあたっての注意点」

岡本真氏（アカデミック・リソース・ガイド株式会社）

岡本氏はかつてヤフー株式会社にて在籍し、Yahoo! 検索や Yahoo! 知恵袋等の企画・設計・運用、また産学連携のコーディネーターに従事した経験を持っている。現在はアカデミック・リソース・ガイド株式会社の代表取締役として、数々の図書館プロジェクト、ミュージアムプロジェクトにかかわっている。近年の主なプロジェクトに富山市立図書館や富山市ガラス美術館などが入居する複合施設 TOYAMA キラリや瀬戸内市民図書館などがある。ここで意識したのはミュージアムへの最初の一步をどうするか、つまり愛好者のみを相手にするのではなくミュージアムの潜在力を引き出しつつ利用者の増加を図ることである。そこで図書館を利用者が定期的にリピート（貸出、返却）する施設であると位置づけ、ミュージアムと図書館を情報とモノ、人において結びつけることで活性化を試みたという。



岡本真氏（アカデミック・リソース・ガイド株式会社）

ここから本題の博物館における SNS の活用に入り、最初に SNS の基礎知識と SNS の特徴的な機能についての話があった。そもそも SNS とは人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティ型のサービスのことである。そこではお互いのコンテンツを共有し、繋がりが可視化されることになることから、現在、SNS は匿名型ではなく、実名型にシフトしている。また、SNS の特徴として、「双方向」、「即時」、「波及」が互いに関連しあって情報が共有されていくことが挙げられる。その一方で公的なミュージアムは直接にレスポンスしにくいことが課題として指摘された。そして SNS の機能に情報を転載するシェアやリツイートがあるが、これは既知の人だけでは利用者が増えないこと、未知の人にどう情報を伝えるのかを解決するものである。さらに伝える情報に「人格」（信頼）が介在することで強い口コミ効果が生まれることになるという。これら SNS の基礎知識等に続いて、いくつかの注目事例が紹介された。

ここから本題の博物館における SNS の活用に入り、最初に SNS の基礎知識と SNS の特徴的な機能についての話があった。そもそも SNS とは人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティ型のサービスのことである。そこではお互いのコンテンツを共有し、繋がりが可視化されることになることから、現在、SNS は匿名型ではなく、実名型にシフトしている。また、SNS の特徴として、「双方向」、「即時」、「波及」が互いに関連しあって情報が共有されていくことが挙げられる。その一方で公的なミュージアムは直接にレスポンスしにくいことが課題として指摘された。そして SNS の機能に情報を転載するシェアやリツイートがあるが、これは既知の人だけでは利用者が増えないこと、未知の人にどう情報を伝えるのかを解決するものである。さらに伝える情報に「人格」（信頼）が介在することで強い口コミ効果が生まれることになるという。これら SNS の基礎知識等に続いて、いくつかの注目事例が紹介された。

- ・プーシキン美術館展 フランス絵画 300 年 愛知会場（2013）・・・展示の目玉作品に描かれた女性像と同じポーズをした女性をコメントと共に紹介し続ける。（肩肘を張らせないことの重要性）
- ・三重県総合博物館（みえむ）・・・新博物館の基本計画や基本構想、設計や工事の進捗状況、利用者参加の催し情報までが事細かに発信されている。（プロセスの発信と瞬間を捕まえることの重要性）
- ・徳川美術館・・・「意図された」かるやかなつぶやきの演出。（ハッシュタグの使い方。人の行動特性を利用）
- ・多摩動物公園・・・「生体」の強み。思いがけない表情や仕草、そこで働いている人しか気づかないものを発信。（資産価値の理解）
- ・国立公文書館・・・とっかかりが難しい「史料」への入り口を提供
- ・山種美術館・・・特性に合わせた写真へのフィーチャー。インスタグラムの投稿は和菓子が主。（美術館としての切り口の独自性）
- ・岐阜県美術館・・・最強の SNS の遣い手。四コマ漫画などでミュージアムの日常や裏側をさりげなく紹介。

講演の最後に SNS の運用にあたっての注意点が話された。SNS は使っている人からすると、そこに情

報がないと存在しないのと同じである。そして活用の注意点として、運用意図を明確にすること、安易な「ゆるさ」に逃げないこと（ゆるキャラなら受けるというものではない。「ゆるさ」には綿密な計画や演出が必要）、炎上におびえないこと（通常、文化施設は社会的注目度が低く、炎上させる意味がない。政治的な問題を取り扱う場合は例外かもしれないが、それは SNS であるかは関係がない。自己の存在意義を明確にすることが重要）、やらない理由を探さないこと、まず個人的にやってみるものの 5 点が挙げられた。

質疑応答

事例発表・講演に続き、質疑応答が行われた。投稿頻度に関する質問について、小埜氏は、毎日自らネタを探しに行くことは展示のことを知り、価値の再発見にもつながるとの回答、岡本氏は投稿頻度は見ている人との折り合いであり、誰を大事にするかは重要。ただしヘビーユーザーを大切にされた方が良いのではないかという回答であった。続いて炎上について質問があり、両者からは「祭り」になるとどうしようもないので、公式見解に導きへたに関与しないことが得策であるとの回答があった。また SNS の活用の他の成功例については、岡本氏より「刀剣乱舞」の影響力の大きさが挙げられた。そこで歴史



質疑応答の様子

やお城系であればオタク的ではない路線でのイメージ戦略の有効性などが話された。また地域のローカルヒーローの描き方・用い方も重要であり、図書館での例として、地域のプロスポーツ選手との連携（自身の進路を決めた本をの紹介など）も効果的だとの例を示された。さらに現在人気を博している「ゴールデンカムイ」という漫画を支えるバックボーンにみんぱくがあることを挙げ、館の利用の仕方設計・され方のアピールを SNS を通じて行うことの重要性にもふれられた。

（愛知県陶磁美術館 学芸員 大長智広）

災害発生時における支援活動要領にもとづく非常連絡訓練の報告

1. 災害発生時における支援活動要領

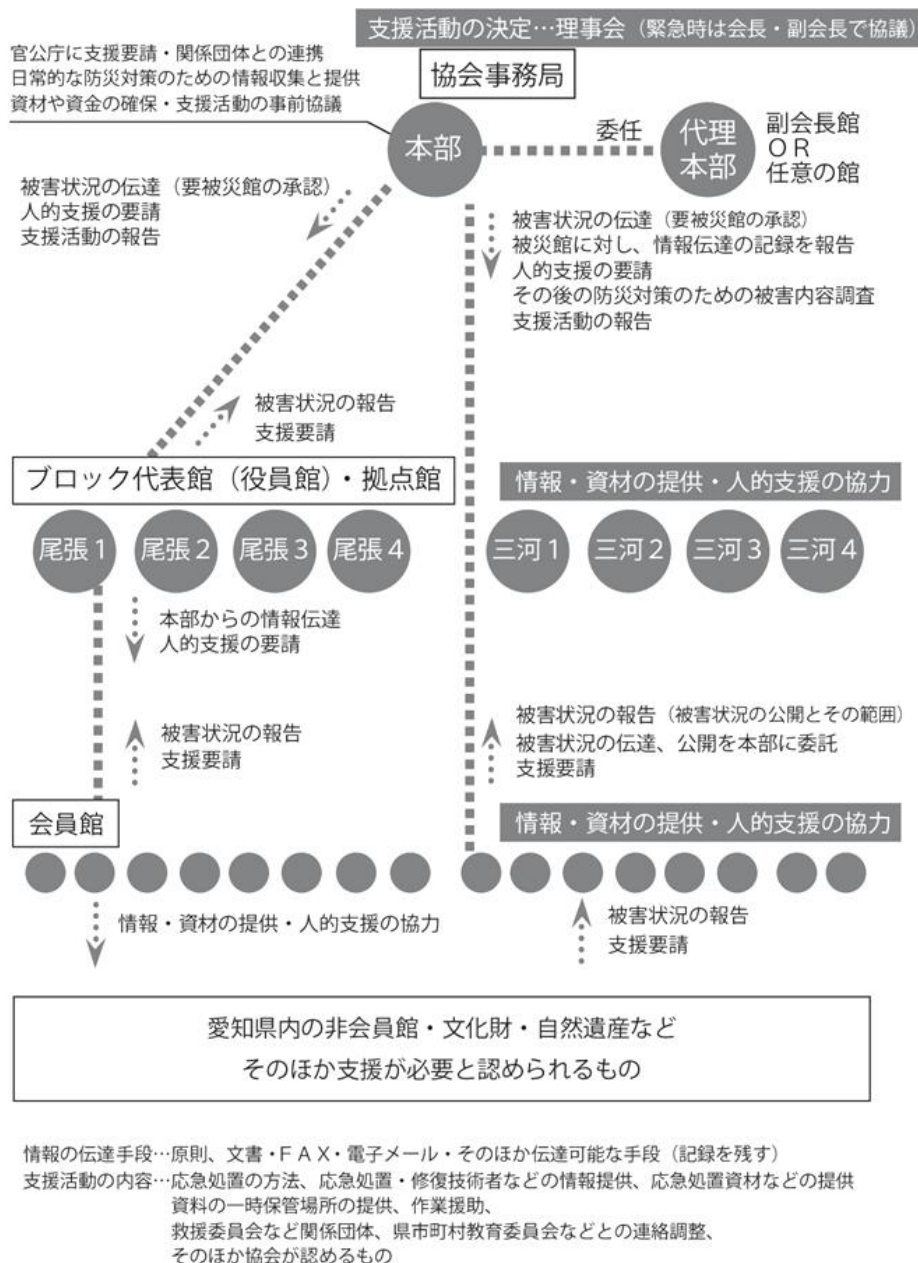
阪神・淡路大震災、東日本大震災といった大規模な地震災害をはじめ、台風や集中豪雨などの自然災害により、日本各地の博物館施設や地域の文化財などが被害を受けている。さらに災害は文化財を守り伝える博物館活動に深刻な危機をもたらしてもいる。

愛知県博物館協会（以下、協会）では、災害による文化財被害を最小限に抑えるため、「災害発生時における支援活動要領」（以下、要領）を平成 27 年度総会で採択した。

図1は、要領にもとづく災害時の支援活動内容をフローにまとめたもので、協会会長館の事務局を本部とし、副会長館を代理本部とする。本部は会員館の被害状況などの情報収集、会員館への支援活動の報告・連絡や他館への支援要請などを担当し、また協会内で支援が完結できない場合、官公庁や他団体への支援要請も行うこととしている。

災害発生時における支援活動について

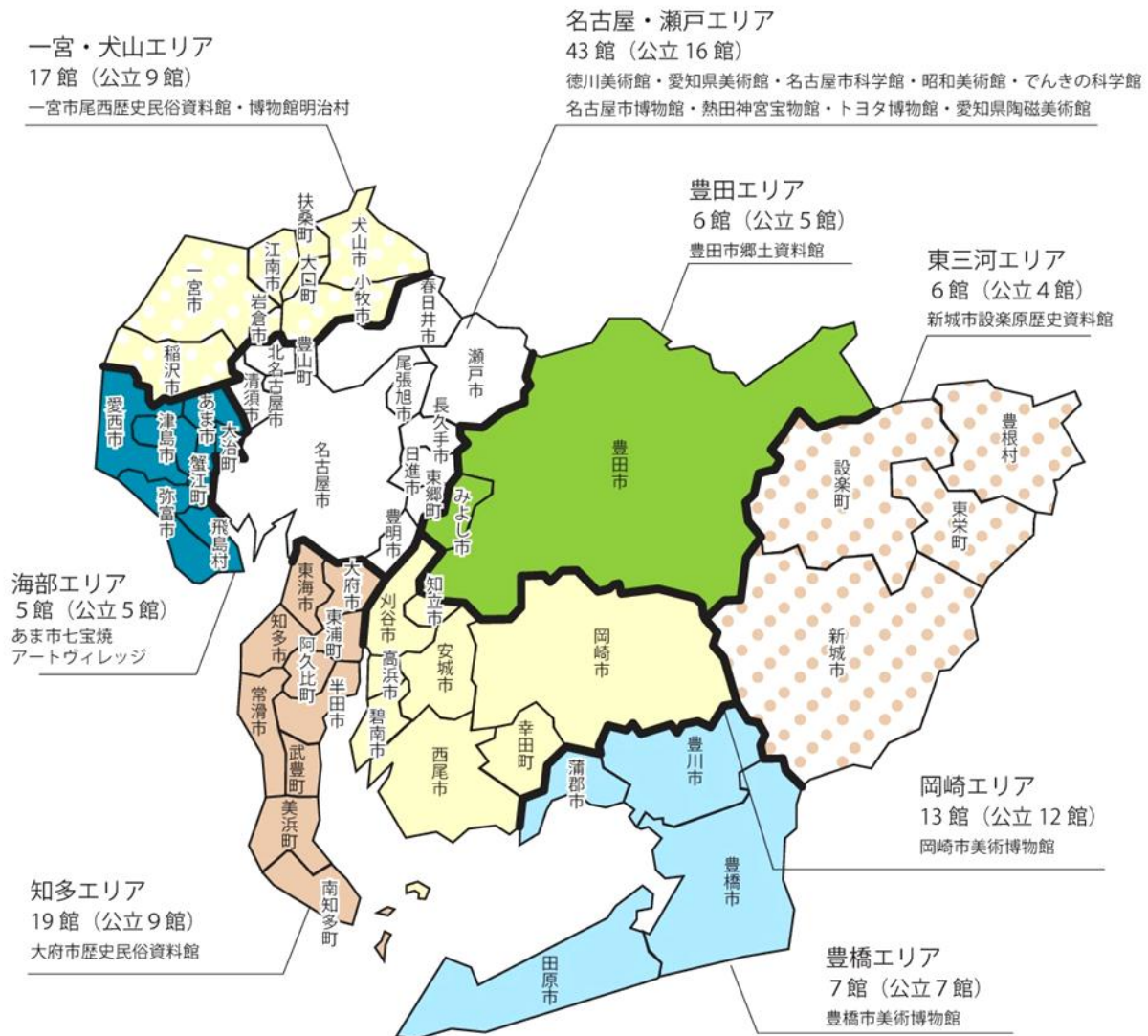
災害発生時における支援活動要領にもとづく基本フロー



(図1) 災害時の支援活動基本フロー

要領では、支援活動実施にあたり、地域ごとに立地や専門性を生かした拠点館を置くことを認めているが、フローでは愛知県内を尾張4、三河4の8ブロックに分け、協会役員を務める理事館および監事館をブロック代表館と位置づけた。ブロック代表館は各ブロックの会員館の被災状況や支援活動状況な

どの情報を取りまとめ、本部と会員館を中継し、本部をサポートする役割を担うこととし、災害時に協会を通じた支援活動ができるように取り組んでいる。



(図 2) 災害時の支援活動ブロック

2. 非常連絡訓練にむけて

協会実行委員会（以下、実行委員会）は、災害時に文化財レスキュー（救出）などの支援活動ができるよう、要領をもとに非常連絡訓練の開催を計画した。まず、図 1 のフローをもとに図 2 のブロック分けを協議して、尾張は、①一宮・犬山、②海部、③名古屋・瀬戸、④知多の 4 ブロック、三河は、①豊田、②東三河、③岡崎、④豊橋の 4 ブロックとした。各ブロックに所属する理事館・監事館がブロック代表館を担当する体制である。

非常連絡訓練の開催は、平成 28 年 6 月の協会理事会と総会で承認された。理事会・総会では、ブロック内の館数の不均衡や地域によって想定される災害が違ふこと、人命救助が優先されるため、館によっては博物館の支援活動に即時に参加できないことなどが指摘されたが、まずは連絡網の機能と問題点を確認する目的で訓練を行うこととなった。

実行委員会は、会員館の災害時の連絡先をまとめた連絡網を作成し、非常連絡訓練で伝達する文書に

ついて協議した。今回は、初めての訓練ということもあり、具体的な災害を想定せず、①文化財レスキュー（救出）の体制、担当が館に定められているか、②災害発生時に勤務する館に参集できるか、③勤務する館で文化財レスキューに従事できるか、④被災時の相互協力を想定している館があるか、⑤どのような災害や被害、困難が想定されるか、といった災害時に考えられる会員館の状況をアンケートすることとし、その結果は、具体的な支援活動内容作成時の参考資料としていくこととした。

訓練の流れは、最初に本部からブロック代表館へアンケートを送付し、ブロック代表館が担当地域の会員館へ転送する手順とした。アンケートの集約も会員館からブロック代表館を通じて本部へ送信し、本部から代理本部へ連絡して情報共有する体制である。

3. 非常連絡訓練

平成 28 年 10 月 19 日、非常連絡訓練は、協会 116 館中、休館中の 1 館をのぞく 115 館の参加で行われた。アンケートの連絡手段は、メールもしくは FAX に限定し、文字による記録を残すこととした。初日の 19 日は 73 館から回答があり、20 日 18 館、21 日 5 館、22 日 2 館、26 日 1 館、31 日 1 館とあわせて 100 館の回答を得ることができた。

しかし、残る 15 館からは回答を得ることができなかった。この結果を受けて実行委員会で協議した結果、未回答館を対象とした再訓練を行うこととし、メールや FAX 送信後の回答が一定の時間がたってもない場合には、電話連絡で確認をとることとした。

再訓練は、翌 29 年 1 月 13 日に実施し、2 月 7 日に未回答 15 館のアンケートすべてを集約できた。前回同様、回収に時間がかかったが、主な原因として、担当者の不在でメール確認ができなかったり、送信メールが迷惑メールフォルダに入ったりと、メール連絡や確認の不備があげられる。これは今後の連絡網整備における課題といえるだろう。

アンケートの回答だが、①文化財レスキューの体制、担当が定められているかという質問に対し、定められている館が 31 館、担当のみ定められている館が 43 館、どちらも組織されていない館が 39 館であった。②災害時に館に参集できるかという質問については 108 館が参集できるという結果であった。③災害発生時に勤務する館で文化財レスキューに従事できるかという質問については、83 館が「できる」と回答した。「できない」と回答した 25 館の理由は、人命救助や避難の対応が優先されるというものが多くみられた。④被災時の相互協力を想定している館があるかについては、全国美術館会議といった全国組織と、同じ自治体が所管する博物館が主であったが、海部ブロックからは行政の枠を越え、海部郡全体で博物館連携があるとの回答を得た。⑤どのような災害や被害、困難があるかについては、すべてのブロックで地震が想定されており、液状化現象、津波、台風、豪雨などの水害、建物や展示資料の倒壊も指摘される結果となった。

4. 今後に向けて

今回の非常連絡訓練では、情報伝達に時間がかかりすぎてしまったことが最大の課題といえる。訓練にあたりメール連絡を希望する館が多かったが、FAX を積極的に活用したり、担当者の不在時に対応できる体制づくりをしたりといった連絡網の改善を考えなければならないだろう。29 年度には速やかな非常連絡訓練を達成したい。

また、ブロックなどの体制の見直しも考える必要がある。実は、鉄道や交通の関係で、独立したブロックにしたほうがいい地域もあったが、ブロック代表館となりうる理事館や監事館がないため、今回の

訓練は暫定的なものとして8ブロックで行った。実際の災害を考えた場合、連絡だけでなく館どうしの行き来も踏まえた体制づくりを行うべきである。

今後は、理事館や監事館にしばられないブロック代表館の選定を視野に入れ、実行委員会から独立したブロックごとのワーキンググループの立ち上げやブロックごとの支援活動のフローづくりをしていかなければならないだろう。

(名古屋市博物館 武藤 真・長谷川洋一)

表紙館の御紹介

■展示館 ブラザーコミュニケーションスペース

【開館時間】

10:00～17:00

(水曜日は夜間延長 ～19:00 まで開館)

【休館日】

日曜日・祝日・ゴールデンウィーク・夏期連休・年末年始
※詳細はHPをご確認ください。

【観覧料】

無料

【所在地】

〒467-0851

名古屋市瑞穂区塩入町5番15号

URL : <http://www.brother.co.jp/bcs/>

【交通手段】

- ・名鉄名古屋本線「堀田駅」下車。徒歩2分。
- ・地下鉄名城線「堀田駅」下車。1番出口から徒歩3分。
- ・お車ご利用の場合

(北から)名古屋高速大高線「堀田 I.C.」を出てそのまま直進「堀田駅南」交差点を右折、すぐ

(南から)名古屋高速大高線「呼続 I.C.」を出てそのまま直進「堀田駅南」交差点を左折、すぐ

【お問い合わせ】

E-mail: bcs@brother.co.jp

TEL:052-824-2227

FAX:052-824-2069



「愛知の博物館」 No.105

発行日 平成29年3月31日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒467-0806

愛知県名古屋市 瑞穂区瑞穂通 1-27-1

名古屋市博物館内

TEL. 052-853-2655